



10月23日(土)・24日(日)
公園まつり

緑化フェア1周年記念



●県立相模原公園・グリーンハウス

「みどりの波を今、かながわから」相模原からの緑の発信」をテーマに昨秋、県立相模原公園・市立相模原麻溝公園において「第9回全国都市緑化かながわフェア・グリーンウェーブ相模原'92」が開催されました。期間中には、全国から181万人もの皆様にご来場いただき、盛況のうちに幕を閉じることができました。会場を訪れた大勢の方々には、花や緑の素晴らしい肌で感じていただけたのではないかと思います。

緑化フェアの開催テーマを継承し、さらに大きく広げていこうという趣旨から、「緑化フェア1周年記念公園まつり」を開催いたします。

市立相模原麻溝公園の大きな花壇においては3万5千株の真っ赤なサルビアが、県立相模原公園の虹の花壇ではマリゴールドなど10万株の花々が、昨年の緑化フェアの思い出をみごとに再現しています。季節の花でつくり上げた「デイラ」の幕す森も、みなさんをお待ちしています。「デイラ」は、緑化フェアにも登場したキャラクターで、相模原に古くから伝わる巨人の話「でいらぼっち伝説」をもとにつくられました。森を見下ろしながらの散策に、巨人になった気分を味わうことができます。

さわやかな秋の一日、花と緑に囲まれたひと時を過ごして、ぜひお出かけください。もしかしら、自然の中で新しい発見があるかもしれません。いつもとは違う花や緑の表情に出会えるかもしれません。



当日は周辺道路や駐車場の混雑が予想されますので、ご来場はバス等の交通機関をご利用ください。

- JR相模原駅▶神奈中バス・北里大学経由相武台前駅ゆき▶総合体育館前下車
- 小田急相模大野駅▶神奈中バス・女子美術大学ゆき▶終点下車
- 小田急相武台前駅▶神奈中バス・北里大学経由JR相模原駅ゆき▶総合体育館前下車
- JR原当麻駅▶徒歩約20分

県立相模原公園
野外ステージ

(雨天の場合は総合体育館)

- ぬいぐるみ劇
「クレヨンしんちゃんショー」
 - 朝川ひろこショー
(緑化フェアイメージソング歌手)
 - グリーンコンサート
ハンドベル
 - トワイライトコンサート
大島彰のオルガン演奏
 - 花とみどりのプレゼント
花の苗・球根の無料配布
(先着順・正午より)
- 23日・24日を通して、他にもたくさん催しを用意しております。ぜひご期待ください。

クレヨンしんちゃん

オープニングイベント

日時：
**10月23日
13:00～**

●観覧自由●
(先着順)

GREEN TALK

グリーントーク ● いま緑を語ろう

古くから人の暮らしと深く関わってきた「植物」。中には、体に有害なものもありますが、「薬」として使われているものも数多くあり、それらは「薬用植物」、「薬草」と呼ばれます。

相模原市内の北里大学には、昭和四十七年に同大の薬学部附属施設として開設された薬用植物園があります。昨年には、ドーム型の温室も完成、同園全体に「バイオガーデン」という名称が付けられ、植物バイオテクノロジーの研究や薬用植物資源の育種・保存に取り組んでいます。

今回は、薬用植物園のスタッフであり、同大学の専任助手をつとめる渡辺高志さんにお話を伺いました。

その草は薬かもしれません。



● 北里大学薬用植物園・バイオガーデン

千八百種類以上の薬用植物を栽培

私たちが日頃使っている「薬」は、植物から成分をもらって作られているものがたくさんあるんですよ。そういう意味でも、植物と人間は深い関わりを持っているんですね。

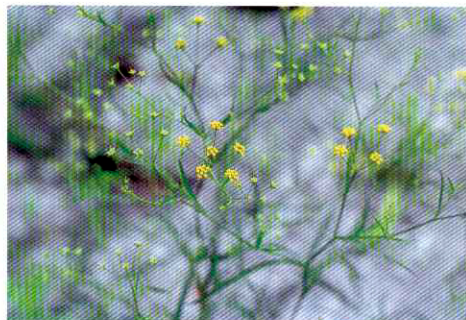
このバイオガーデンでの私の仕事は、野や山を駆け回って薬用植物を採集してきて育てたり、それを保護したり、研究して増殖したりすることです。

昨年、ドームも完成したんですが、この中にはシナモン、バニラ、カカオ、コーヒーといったような、熱帯、亜熱帯系の植物が三百種類ほどあります。ドームの外には、古来、日本で薬用として使われてきたゲンノショウコ、シヤクヤク、ボタンのような伝統薬用植物や、ヒガンバナ、ジギタリスといった毒性のある有害植物、ハスやショウブ、ガマなどの水性植物、また、マンサク、ビワ、キハダといった薬木など、まだ薬用に使えるかどうか分からないものも含め、園内には千五百種類以上は植えてあります。

かつて相模原に群生していたといわれるミシマサイコもありますよ。これも解熱や鎮痛などに使われています。今、エイズが大きな



● コガネバナ



● ミシマサイコ

問題になっていますが、抗エイズウイルス作用があるといわれているコガネバナも栽培しています。

世界的に見ても珍しいものや絶滅が危ぶまれているもの、幻の植物といわれているものなど貴重な植物も数多くあるんですよ。

そういったたくさんさんの緑があるからでしょう、この病院の入院患者さんが散歩している姿を見かけることもあります。

ゆくゆくは一般開放して、植物観察会なども開きたいと思っていますが、まだそこまで手がまわらないのが現状ですね。

子どもの頃から花壇の手入れをしていました

私自身、子どもの頃から植物が好きだったんです。家の屋上でバラやキクなどを育ててましたし、学校の花壇の手入れもよくやっていた。その頃から漠然とは、植物に携わる仕事ができたらとは思ってましたけど、大学は薬学部へ行ったんです。当時は、植物と薬学のつながりなど考えもしませんでしたけど、それがこうして植物と毎日接しているんですから、縁があったということでしょうか。

薬草の研究をするようになったのは、大学二年の時に、ある先生と出会ったのがきっかけです。その先生は日本の植物だけでなく、世界各国の植物に精通している方で、植物園の採集会などでも指導されていたから、よく出かけて行つて話を聞いていました。

植物民俗学なども研究されていて、植物のとなえ方にしても奥の深いものがあるんですね。大学卒業後は、国際協力事業団の活動なども含め、海外の方へよく行きました。

ヒマラヤ、ネパール、インド、スリランカ、シンガポールなど、アジア各地をまわりましたが、これらの地域は日本と植物形態が似ているんです。同じような植物があるかと思えば、同種なのに大きさが三倍もあったりして興味深いですね。

もちろん、日本にはまったくない植物もあるわけ、ほんとうにそれがあるかどうかわかめたいんですね。図鑑の中でしか見たことがない植物に出会うというの、やっぱり



● アンナプルナ・タウラギリ方面の調査

り感動します。

また、異国の文化に触れたり、現地の人たちとの交流など、植物以外でもいろいろな出会いがありましたね。でも、山岳地の急斜面で怖い思いもしたし、川の増水で助けを求めたり、失敗もけっこうあったんですね。

植物を知ることが保護にもつながります

昨年のグリーンウェブでは、推進委員会、市薬剤師会からの協力依頼がありまして、会場内に薬草園を設置するというので、ここから薬草を運び込みました。人口五十五万人にちなんで五十五種類の薬草を展示したんですが、反響も大きく、興味を持って見に来てくれる人も多く嬉しかったですね。この草ならうちの庭にもある、と身近に感じてもらえたようです。

ヨモギとかドクダミとか、オオバコなんかもその辺りに生えているただの草のようですが、これらは薬草なんです。こういう身近な植物が人間の体に役立っているんだと知ることが、植物を愛する心を芽ばえさせ、大切にする気持ちをも育むんだと思います。

よく山などから植物を持ち帰る人がいますが、それはそこが適している土地だから自生しているんです。むやみに持ち帰ったり、荒らしたりしないで、その状態のまま残しておいてあげたいですね。

絶えかけている植物を「絶滅危惧種」と呼んでいます。それが年々増えています。みなさんがよく知っているオミナエシなんかもそうなんです。これも薬草なんです。最近見なくなったと思いませんか。

植物をとりまく環境の変化が、森や林などに影響を与えているといわれますが、薬草も例外ではないんですね。一本の草木も粗末にしない、そういう気持ちを個人個人持つことが自然を守るためには必要なんじゃないかな。

渡辺 高志（わたなべ たかし）

北里大学薬学部附属薬用植物園助手
一九五九年東京・葛飾生まれ。帝京大学薬学部卒。農林水産省果樹試験場研究員を経て、国際協力事業団などでアジア各国に貢献。前職は帝京大学薬用植物園技術員。著書に「海外国際協力とボランティア活動」、「植物遺伝資源入門」、「薬草全書」（一九九四年発行予定）などがある。



● オミナエシ
オミナエシ科の多年草で、秋の七草のひとつ。
日本各地に自生し、朝鮮半島、中國大陸に分布。薬効は解熱、消炎、浄血など。

● ミシマサイコ
その昔（江戸時代頃まで）と推定される市内に群生していたことから、相模原一帯は「柴胡の原」と呼ばれた。セリ科で初夏の頃から花を咲かせる。現在では野生のものはほとんど見られないといわれる。

● コガネバナ
和名は黄金花であるが、黄色の花という意味ではなく、根の色をさして名付けられた。シソ科で、薬効は消炎、解熱など。原産地は中国北部からシベリアにかけて。

● 北里大学内の薬用植物園
（バイオガーデン）
六千七百平方メートルの敷地に栽培されている数々の薬用植物と、昨年建設されたドーム型温室。